肢体不自由児を対象としたダンスムーブメントプログラムの展開
—軽く柔らかく動く—

松原　豊・西　洋子・岩岡 研典

研究目的

ダンスを中心にした運動プログラムは，スポーツなど他の運動領域に比べ，比較的自由度が高く，言語的コミュニケーションが成立しにくい子どもたちにとっても，主体的に運動のレパートリーを拡大することのできる可能性を有することから，肢体不自由を持つ子どもたちに適した身体表現活動としても期待される。

そこで本研究においては，小学校学習指導要領における表現運動のうち「軽く柔らかい」動きを題材として取り上げて授業プログラムを試案，実施し，プログラム前後の表現について検討し，肢体不自由を持つ子どもたちのダンスムーブメントプログラム作成のための基礎的な資料を得ることを目的とした。

研究方法

子どもたちの障害は脳性マヒ（痙直，アテトーゼ），二分脊椎，骨形成不全症である。

ダンスムーブメントプログラムは3週間にわたり，週1回，1授業時間（40分）で実施した。

第1週目は，「軽く柔らかい」という特定の質の動きを経験することをねらいとし，動きを引き出すための手がかりとして①擬態語②軽くて，柔らかい材質の小道具③浮揚感のある音楽，などを用いた。

第2週目は，「軽く柔らかい」動きから多様なイメージを引き出すことをねらいとして，前時のイメージや動きを発展させたり，動きのレパートリーを増やすことを中心に行った。

第3週目では「軽くて柔らかい」という質を表すイメージのひとつとして「鳥」という特定のイメージからいろいろな質の動きを経験させた。

毎時の授業の様子および，各児童が「軽くて柔らかい」と考える表現をVTRに収録し，身体部位の使い方，表現の多様性等について検討した。

また多様化の評価をするために，身体の位置，運動の部位など動作幅に関する指標を作成し，分析した。

また，授業時に発表されたイメージについても考察を行った。

結果，考察

図1は小2の子どもたちの身体表現に対して，上下方向の動作幅の変化をグラフ化したものである。各列，左側が事前，右側が事後である。

事後の方が，身体全体を使って上方へ伸び上がったり，伏せたりするような，振幅の大きい表現をしている。

表1は，左右方向への動きについて，動作幅の変化を示したものである。上下方向の場合と同じく，事後の方が，体をゆらしたり，首から体幹を連動して動かしたり，膝立ちで移動するなど，全身的な動きが見られた。

今回の研究では動作の幅が広がった原因は不明であるが，擬態語，音楽のような聴覚的な手掛かり，スカーフ，風船などの視覚的な手掛かりを用いたこと，第3週目では意図的に質の異なる動きを経験したことなどが要因の1つとして推察される。

動きとイメージの変化については，第1週目では，「シャボン玉」，「鳥」など，擬態後に対応した身近な事象に対する単語的なイメージであった。第2週目には，2語文，まとまりのある短文のイメージなどが出てきた。第3週目には，動作の幅が広がったことに対応して，「シャボン玉に乗って海に行き泳いだ」など空想的・想像的な物語を自分で創ってそれを動きで表現するものもいた。

健常児において，松本は，4歳児では題材に対して単一的な動きが多く，5歳児では空想的・想像的な題材から，種々な動きを導きだすことが可能であると述べているが，機能的な制限が多く運動のレパートリーを広げる機会の少ない肢体不自由児でも，本研究のように，動きとイメージが結び付いた身体表現を行うことで，動きの多様化が促される可能性は大きいと思われる。

さらに，ダンスの特性をいかしたプログラムを作成，実施すると共に，本研究で用いた指標と共に，実際の授業場面で応用していくことが今後の課題である。

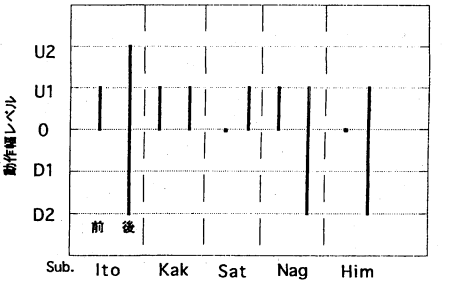

図1　プログラム実施前後の動作幅（上下）の変化［小2］

表1　プログラム実施後の動作幅（左右）の変化［小2］

Sub.	事前	事後	備考
Ito	0	0	大きくゆっくりした腕回し
Kak	0	1	
Sat	1	3	
Nag	0	1	手首を使った表現
Him	1	3	